体験談③

戦争が教えてくれたもの

斉藤　美代子（さいとう みよこ） 87歳

1945年8月15日、私が小学校六年生の時、終戦しました。当時、三田市相野に疎開していました。ラジオから天皇陛下が悲しい声で敗戦、そして終戦を放送されました。

戦後、母は敗戦が悲しかったのか声を出して、泣いていました。

でも、私は爆弾や B29 の低空を飛ぶ飛行機、そして電灯を風呂敷で包んで暗くする生活に恐怖におののいた日々から解放されて、うれし涙が出ました。

戦時中、小学校5年生の春、都会（十三）の小学校に通っていた私は、三つ年下の弟と、三田市相野の母の実家へ疎開することになりました。

平和な家庭から突然田舎の生活に移りました。汽車に乗って帰りたく線路を歩いて帰ろうと夜中に何度も思いました。母恋しです。転校した小学校になじめずに弟と二人で抱き合って淋しさを、まぎらわしていました。

でも2つ良いことが、ありました。私達（弟と私）を救ってくれたのが、同級生が、優しくお友達になってくれたことと、爆弾が飛んで来ない安心感でした。

反面、父母が無事かどうか、自分たちだけ安全な所に居て申し訳無い思いで涙が枕をぬらしていました。

疎開先で、困り果てている時の人の優しさは身にしみます。友が学校で仲間に入れて遊び時間や帰路にも話しかけてくれた優しさです。方言の違いも友達が出来ない原因でした。人への優しさを教えてもらいました。私もこんな優しい人になろうと戦争の中から勉強させてもらいました。

戦後、アメリカ人が日本に駐留することになり私の家の近くの大きな家屋に住むことになりました。アメリカ人はバター、バナナ等を私達の手の届かない物を食べていました。アメリカの男性は派手な日本の女を連れて得意気に、女を品物のように扱っていました。女性も食べていくには仕方なかったのです。子どもを産んでも父の責任も果たさないで女をもてあそんでいる姿を見て、私は女も立ち上がり、強くしっかり勉強して自立しなくてはと、子ども心に強く思いました。

戦争は絶対にしてはなりません。広島、長崎への原爆投下、許せません。

核無き平和な世界にと戦争体験を知っていただき、これからの輝く日々を祈ります。